

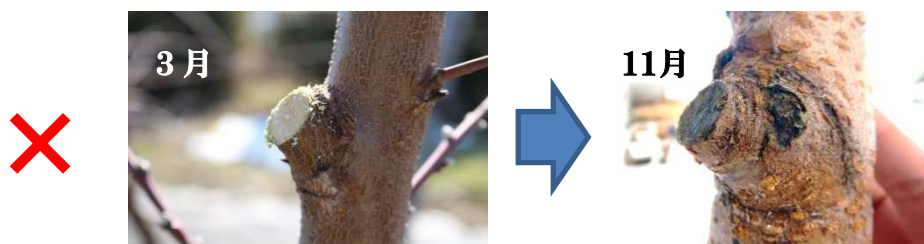
モモ枯死症の発生抑制に向けて（第3報） モモのゆ合を促す剪定方法について

平成29年11月
山梨県果樹試験場

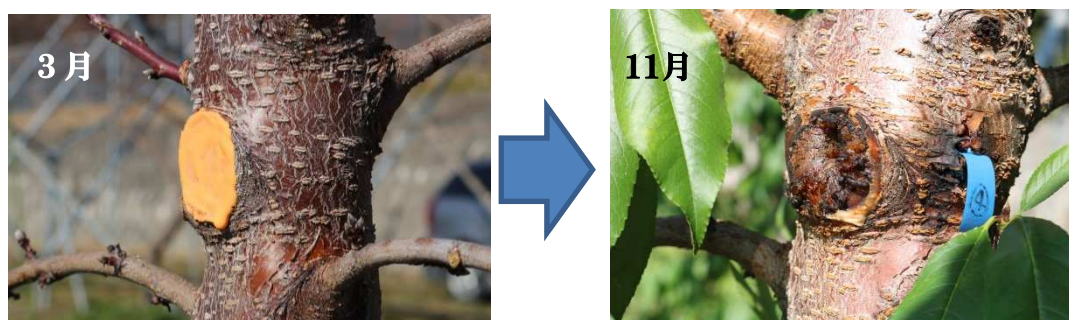
○平成28年に、モモ枯死症の発生抑制に向けて（第1報）を報告したが、剪定時の切り口とゆ合の関係の知見が得られたので報告する。

○枯死障害の発生ほ場を巡回すると、障害発生樹には剪定時に枝の基部を残す、いわゆる「切り残し」が多く見られる。ゆ合しない切り口には枯れ込みや胴枯病の感染が多く見られる。このことが枯死の原因と考えられる樹が多くある。

また、苗木では台木部分の「切り残し」があり、そこから胴枯病の感染している樹も多く見られる。



切り残しのある切り口は、ゆ合剤を塗布してもゆ合せず、枯れ込みや胴枯病の感染リスクは高くなる。



基部を残さずに「すり切り」で切り、ゆ合剤を塗布すると、切り口はゆ合して、枯れ込みや胴枯病感染のリスクは低減する。

剪定の方法がモモの切り口に及ぼす影響(H29)

剪定方法	カルスを形成した切り口数 (10ヶ所中)	ゆ合率 (%)
すり切り	10/10	89.7
切り残し	1/10	3.7

※果樹試験場場内ほ場での調査。剪定は3月に実施。

切り口にはトップジンMペーストを塗布した。

カルス：傷口をふさぐための増殖する組織。



台木部の「切り残し」は、きれいに剪除し、ゆ合剤を塗布する。

○切り口のゆ合を促し、枯れ込みや胴枯病感染リスクを低減するには、

①若木の剪定は、厳冬期を避け、3月上旬に実施する。

②剪定時の切り口は枝梢の基部を残さない「すり切り」とする。

③主幹や主枝、太枝の切り口には、必ずトップジンMペースト等のゆ合剤を塗布する。

以上のことを励行するとともに、夏季新梢管理や秋季剪定を実施して、冬季剪定時に主幹や主枝上の大きな切り口を少なくする管理を行うことが大切である。